MfG_J_Literature_in_Niigata_Nagaoka

　ここ摂田屋、宮内の文学と云えば、松岡譲であり、長岡は堀口大學が
少年時代から旧制長岡中学卒業までを過ごした地です。
松岡譲と堀口大學は、旧制長岡中学時代、同級生だったそうです。

松岡譲は、摂田屋から南東、3．5キロの石坂(村松)にある本覚寺に生まれ、
旧制中学卒業まで長岡で育ちました。
また先の大戦の末期に長岡へ疎開、以後亡くなるまで、長岡で過ごしました。
疎開生活の最初は　宮内摂田屋の梶山神社近くに住まいし、宮内原信近く
の交差点から沢田跨線橋東詰に流れる小川で、魚釣りを良くしていたとの
ことです。その後、蒼紫神社近くに移り、さらに悠久山公園内に引っ越した
とされています。

堀口大學は少年のころ、夏休みは昆虫採集に一生懸命だったようで、町なか
の住まいから栖吉まで、虫取り網を持って歩いたそうです。また雪国の生活
の辛さも知り、彼の詩作から、雪国に生きる人々への想いが読み取れます。

大學の尊父堀口久萬一も、明治の外交官の業績のほか漢詩にも優れ、友人
の武石貞松とともに、多くの漢詩を遺しています。
この二人は、長岡殿町にあった誠意塾で共に学びました。

本当にすごい人がたくさんいました。

（T-3-7_長岡、新潟の文学の系譜）

長岡は、アート、音楽のみならず、文学でも薫り高い町です。江戸時代には
三国街道の通り道、北國街道に近接ということで交通の要衝であったことから、
多くの文人墨客の訪問が相次いだようで、当時の豪農の資料館で、思わぬ
お宝を拝見できることも、度々です。
近代ても、長岡藩関連の人物の子孫をはじめ、多くの人物が小説や俳句等の
文学の分野で関係をもっています。

また長岡は大合併地域を含めると、四つの良寛記念館、史料館があり、銅像も
多数あって、まさに良寛の町です。 新潟市の市美術館に隣接する西大畑
公園にも、手毬り遊びに興じる子供たちと良寛さんのすばらしい群像銅像が
あります。　良寛さんは全国にフアンも多く、話題の一つとしてポケットに
入れておくべきと思います。

目次

1. 小説、漢詩、俳句
2. その他、信濃川　「大手大橋」、「越の大橋」河畔、付近の文学関連石碑
3. 出版人
4. 文学・漢学者
5. 堀口大學、司馬遼太郎氏、松岡譲との縁
6. 堀口大學 「そして今」という　最晩年、望郷の詩
7. 火坂雅志さんと与板との縁
8. 校歌の歌詞と反戦の話について
9. 良寛さん
10. 放浪俳人二人　井上井月と山頭火
11. 相馬御風と長岡

参考　井上井月の最近の注目記事

1. 小説、漢詩、俳句

・杉本鉞子（1873-1950） 長岡藩家老職・稲垣家の、タイトルそのままの、「武士の娘」。
～コロンビア大学で講義、同大名誉教授のドナルド・キーンとの縁。
・松岡譲（1891-1969） 小説家。 生家は村松の本覚寺。
～妻は夏目漱石の娘の筆子さん、自身の長女の夫が小説家の半藤一利氏。
若い時に結婚にまつわる問題に巻き込まれた。松岡に非のないのは、妻筆子さんの述懐で明らかで、本来大小説家になったはずが寡作に終わり残念でした。
郷土史料館には松岡の文人画家としての作品や絵の道具が多数展示されています。

・堀口大學 （1892-1981） 母の早世、父の海外赴任を機に、祖母の住む長岡・愛宕に移る。
～慶応大学入学まで、長岡で過ごす。鉢伏・栖吉を駆ける昆虫少年だった由。
～松岡譲とは長岡中学の同級生。彫塑界の先駆者・武石弘三郎は、深い縁の生涯の友。
～佐藤春夫は終生の文学の友、与謝野鉄幹・晶子は師。 1979年（昭和54）文化勲章。
～長岡中学第二校歌の作成感想を、最初に春夫と大學の父・久萬一に求めたという。
久萬一は趣味としてフランス現代詩の漢訳、子息大學がそこから和訳という詩もある。
～同年代のフランスの詩人アポリネール、画家ローランサンとの交友。

・星新一 （1926年 – 1997年）日本の小説家、SF作家。 祖父は旧長岡藩士の小金井良精。
著作に「祖父・小金井良精の記」があり、幕末、明治の長岡が詳しく記されている。
・島崎藤村 （1872-1943）詩人、小説家。 長岡藩の支藩であった小諸に、記念館がある。
～小諸藩では、幕末、同藩の跡目相続の解決に、河井継之助が貢献。
信州木曾の中山道馬籠（現在の岐阜県中津川市馬籠）生まれ。
・宮柊二（みや しゅうじ、1912年（大正元年）8月23日 – 1986年（昭和61年）12月11日）
昭和時代に活躍した歌人。本名は宮肇（はじめ）。堀之内町（現魚沼市）に生まれる。
長岡中学卒。 宮中歌会始の他、新聞・雑誌歌壇の選者をする。
・高野 素十（たかの すじゅう、1893年3月3日 – 1976年10月4日）は、茨城県出身の俳人、医師（医学博士）。 高浜虚子に師事。 水原秋桜子、中村草田男らとともに「ホトトギス派」を牽引。
1905年、長岡に住む叔父のもとに寄宿し長岡中学に入学。第一高等学校を 経て東京帝大医学部入学。卒業後法医学教室に入局。同じ教室の先輩に水原秋桜子。彼の勧めで1923年より句作を開始。ドイツ留学帰国後の1935年、新潟医科大学法医学教授に就任。
高浜虚子は、戦争疎開で三年ほど小諸に在住。 小諸に市立記念館がある。

・火坂雅志（ひさかまさし、1956年 – 2015年）小説家。本名は中川雅志（なかがわまさし）
南中、新潟高校、早稲田大学卒。これから活躍という時に死去。詳細別記。

・井上井月（文政5年（1822年）？ － 明治20年（1887年） 19世紀中期から末期の俳人。
悠久山・蒼紫神社参道に句碑。「何処やらに鶴(たづ)の声聞く霞かな」
信州伊那谷を中心に活動し、放浪と漂泊を主題とした俳句を詠み続けた。
その作品は、後世の芥川龍之介や種田山頭火などに影響を与えたとされる。

・種田 山頭火（たねだ さんとうか、1882年（明治15年） － 1940年（昭和15年）本名・種田正一。
柿川・追廻橋のたもとに 「図書館はいつもひっそりと松の秀」 の句碑がある。
「長岡の俳友小林銀汀氏宅の二階より若葉ふりそそぐ隣接の互尊文庫を眺めてつくる
昭和11年5月31日作 山頭火短冊による」との覚書がある。戦前日本の自由律俳句の俳人。
1925年に熊本市の曹洞宗 報恩寺で出家得度して耕畝（こうほ）と改名。

・良寛 宝暦8年(1758) － 天保2年(1831) 長岡駅構内に銅像、市内、及び周辺には
四つの良寛記念館・史料館、多くの銅像や句碑があります。

・鈴木牧之 明和7年（1770年） － 天保13年（1842年） 江戸後期の商人、随筆家。魚沼塩沢生。
越後国まれる。19歳の時、縮80反を売却するため初めて江戸に上り、江戸の人々が越後の
山東京伝の雪の多さを知らないことに驚き、雪を主題とした随筆で地元を紹介しようと決意。
弟山東京山の協力を得て、1837年『北越雪譜』初版3巻刊行。他に秋山郷の紀行文。

2. その他、信濃川 「大手大橋」、「越の大橋」河畔、付近の文学関連石碑
・星野慎一 (1909-1998) 長岡出身のドイツ文学者。 東京教育大学教授。
～山本有三(米百俵)のきっかけ～ドナルド・キーン(米百俵の翻訳)
水道公園の詩碑、「信濃川よ 静かなるながれを見れば かぎりなく 想いわくかな」

・海音寺潮五郎 (1901-1977)
石碑は 「大広野、流るる川の信濃川、豊かなるかも美しきかも・・・」
上杉謙信と宿敵武田信玄を描いた「天と地と」 など、越後を舞台とする小説も多い。

・司馬遼太郎 (1923-1996) (峠、他) 越の大橋たもとの「峠」文学碑。1993年 文化勲章。
日本の小説家、 ノンフィクション作家、評論家。大阪府大阪市生まれ。
筆名の由来は「司馬遷に遼（はるか）に及ばざる日本の者（故に太郎）」から来ている。

3. 出版人

・長谷川巳之吉と第一書房　長谷川巳之吉（みのきち、1893年1 – 1973年） 出雲崎生まれ。

1923（大正12）年、伝説の出版社「第一書房」を創業したことで知られる。

雑誌・書籍編集者、実業家である。

伝説の出版人である。 堀口大學の美装本は、豪華のひとこと。

1920年代の発行書籍の一例として、下記のよう。

松岡譲『法城を護る人々』（1923年）、堀口大學訳詩集『月下の一群』（1925年）

上田敏『上田敏詩集』（1925年）、佐藤春夫『佐藤春夫詩集』（1926年）

・大橋佐平他、大橋一族　大橋佐平(1835～1901)

長岡で異才を放った人物が52歳で上京。出版社博文館を創業し成功。書籍取次、通信社、洋紙業、印刷業など時流の先を読み時代の先頭に立った。

三男（長男と次男は早逝）は博文館第2代館主の新太郎、四男は東京堂第2代主人の省吾。

博文館がすぐれていたのは、出版社経営についての企業戦略であった。

大橋佐平は出版社を、産業のなかのひとつの歯車としてとらえた。

富国強兵の時代風潮に乗り、数々の国粋主義的な雑誌を創刊すると共に、取次会社・印刷所・広告会社・洋紙会社などの関連企業を次々と創業、日本最大の出版社となった。

2016年現在、博文館グループの博文館新社および博友社として存続している。

博文館の企業グループ

1891年、取次部門として東京堂（東京堂書店およびトーハンの前身）を発足させる。

1893年、広告会社として内外通信社を設立。

1895年（明治28年）創業の博報堂が、1910年7月，博文館の経営していた内外通信（小説・文芸ニュースなどを地方紙に配信)を譲り受けて通信業をも兼営し，社名も内外 通信社広告部博報堂と改めた。総合的な広告会社へと転換して発展をとげ，取扱高で 電通に次いで第2位の巨大企業になっている。

1895年に初の総合雑誌『太陽』誌を創刊、黄金時代を築く。

太陽は、1895年（明治28年）1月から1928年（昭和3年）2月まで、計531冊発行した、日本初の総合雑誌。大正デモクラシーの世相に乗り遅れて、廃刊した。

1896年、博文館印刷所を設置（共同印刷の前身）。

1897年（明治30年）、博文館主の大橋佐平が自社の書籍・雑誌を印刷するために創設した博文館印刷工場が前身。1925年（大正14年）、美術印刷中心の精美堂との合併により共同印刷株式会社となった。総合印刷業としては大日本印刷、凸版印刷に次ぐ第3位と長らく言われていた が、現在はトッパン・フォームズ、日本写真印刷に次いで業界5位。

4. 文学・漢学者

諸橋轍次 （1883年6月4日 – 1982年12月8日）は、漢字の研究者。～三条市立諸橋轍次記念館
大著『大漢和辞典』や『広漢和辞典』（ともに大修館書店刊）の編者。
文学博士。東京文理科大学名誉教授。都留短期大学および都留文科大学の（四年制大学としての）初代学長。
1960年、大漢和辞典全13巻が完成した。この功績により1965年、文化勲章を受章、
数十年に渡り修訂し刊行された。本人によると直江兼続の子孫である。号は止軒。

～漢文学者・東洋学者であり、漢字辞書としても著名な白川静氏との世代比較
白川静（1910年4月9日 – 2006年10月30日） 文化勲章（2004年）、立命館大学名誉教授。

鈴木虎雄

鈴木虎雄（1878年〈明治11年〉1月18日 – 1963年〈昭和38年〉1月20日）は、古典中国文学者。
西蒲原郡粟生津村（のち吉田町、現在は燕市に合併）出身。燕市名誉市民。
長善館の粟生津は、開塾当時、長岡藩領だった。
父は長善館二代館主鈴木惕軒で、その八男（戸籍上は五男）。一時大橋家の養子となり、
大橋姓を称したが、後に鈴木姓に復した。妻は陸羯南次女・鶴代。
幼少時は長善館で父惕軒に師事する。上京後、東京英語学校、東京府尋常中学、第一高等中学校で学び、1900年（明治33年）、東京帝国大学文科大学漢学科卒業。同大学院中退後、日本新聞社、東京高等師範講師・教授などを経て、1908年（明治41年）に新設間もない京都帝国大学文科大学助教授に就任する。1919年（大正8年）には教授、
1938年（昭和13年）に名誉教授。1939年（昭和14年）より帝国学士院会員。1958年（昭和33年）に文化功労者、1961年（昭和36年）に文化勲章受章。
日本における中国文学・文化研究（中国学）の創始者の一人で、東洋学における京都学派の発足にも寄与した。著名な弟子に吉川幸次郎と小川環樹らがいる。多くの古典漢詩の訳解を著述し、自身も漢詩を多く作成した。 小川環樹氏の兄弟に貝塚茂樹氏、湯川秀樹氏。
号を漢詩では豹軒、和歌では葯房と称す。

～陸羯南（くが かつなん、安政4年丁巳10月14日（1857年11月30日） –
明治40年（1907年）9月2日）は、日本の国民主義の政治評論家。
日本新聞社長。正岡子規を育てた。幼名は巳之太郎、のち実号が羯南。
鈴木虎雄や文学から離れますが、長善館の出身者に関連する、新潟、日本のそして、
医学に貢献した人、大河津分水建設に尽力した人々。 ノーベル医学生理学賞受賞者
の大村智博士との関わりを始め、全国的に名の知られた人物が次々と出てきます。

西脇 順三郎、1894年（明治27年） – 1982年（昭和57年）日本の詩人、英文学者（文学博士）。
戦前のモダニズム・ダダイスム・シュルレアリスム運動の中心人物。水墨画をよくし、
東山と号した。小千谷市名誉市民。

5. 堀口大學、司馬遼太郎氏、松岡譲との縁
堀口大學さんの妹さんが美術史家の秋山光男さんと結婚され、その息子さんが
美術研究者の秋山光和さん。
この秋山光和さんと結婚されたのが、日本画家の前田青邨さんの娘さん。
その前田青邨さんのお弟子さんのひとりが、平山郁夫さんです。
平山郁夫さんの院展出品の大作二点が、駒形十吉記念美術館にあります。
「塵燿のトルキスタン遺跡」 (1970)と「中亜熱闘図」(1971) 。これは、平山さんのシルクロード・
仏教東漸をテーマにした初期の記念碑的作品で、長岡に2点揃っていることはすごいこと。
駒形十吉さんが、若き日の平山郁夫さんの活動を支援したからこその、駒形さんからの贈り物。
私の趣味のひとつ、美術の中の、好きな近代日本画家の二人、前田青邨さんと平山郁夫さん
とが、「長岡」で、つながりました。

松岡譲さんの敦煌物語 (1943)。
井上靖さんの「敦煌」(1959)によるシルクロードブームに先行する作品で、作者自ら「文化史的
小説」という、当時の最新学術情報満載の、すごいアカデミックな小説です。
敦煌学を含め、この分野の古典的名著である1926年刊行の羽田亨著″西域文明史概論・西域
文化史″、現在は東洋文庫に収録の本から、多くを材料にしているとされています。
さらに松岡譲の娘婿が、「山本五十六」の著作でも有名な、歴史評論の半藤一利氏。
戦時中、父上の生家のある長岡市へ疎開し、県立長岡中学校3年次で終戦を迎え、東京へ
戻っています。浦和高校 (旧制) (学制改革のため1年間で修了) を経て、東京大学文学部
国文科卒業。1953年 (昭和28年) に文藝春秋新社に入社した氏は、編集者時代から作家の
司馬遼太郎と親交がありました。司馬さんは、長岡では「峠」の作者として有名ですが、シル
クロードに題した、多くの小説も書かれています。
ですから長岡は、平山郁夫さんのシルクロード初期作品2点をはじめ、シルクロードをテーマ
としても十分語ることができ、お見せできる町だと思っています。

堀口大學の父、久萬一は、外交官として近代日本に多くの貢献をした人ですが、漢詩人として
も、優れた人物でした。　大學が生涯、自身の随筆などの文章のなかで、「父」というより「長城
先生」と呼ばしめたように、大學の文学の師匠の一人でもありました。 その父の功績を、大學は、
「長城詩抄」という本にまとめ、世に出しました。 ちなみに長城は。久萬一の号。
その久萬一の生涯の友、武石貞松が明治末に、高田の東北日報新聞の漢詩撰者で あった
当時、会津八一が、同紙の俳句撰者でした。 会津八一は、中学生の頃より『万葉集』や良寛の
歌に親しみ、後年、正岡子規に会ったときに良寛を紹介、後日良寛の歌集を送ったと言われて
います。 新潟が誇る歌人・美術史家・書家である会津八一氏は、県内からのゲストのみならず、
全国的にも知られており、いろいろな話題が展開できると思います。

6. 堀口大學 「そして今」という 最晩年、望郷の詩

そして今、こころに生きる
ふる里の越は北国・・・。

北国の弥生は四月、そして今
四月になって、梅桜桃李
あとさきのけじめもなしに
時を得て、咲きかおり・・・。

そして今、遠山なみに霞立ち
蒲原の広野の果ての国つ神
弥彦山、むらさき裾濃（すそご）
神さびまして鎮もれば・・・。　（しず）

そして今、信濃川
雪解水集めて百里　（ゆきげみず）
嵩まさり
西ひがし岸べをひたし
滔々と濁水はこぶ
逆巻いて

そして今、こころに生きる
ふる里の越の四月は・・・。

「長岡は僕のふるさと」

なかなかしぶとい寒さです
めいわく至極な大雪の
積もるに任す
なさけなさ!

昭和38年1月 未発表

軸装

越による雪の深さか
越びとの哀れの深さ

作成年　不詳

7. 火坂雅志さんと与板との縁

(1) 日経2015/2/27付の死亡記事

58歳で死去 、歴史小説「天地人」

「天地人」や「天下 家康伝」などの歴史小説で知られる作家の火坂雅志（ひさか・まさし、本名＝中川雅志＝なかがわ・まさし）氏が26日午後5時10分、急性膵炎のため神奈川県伊勢原市の病院で死去した。58歳だった。告別式は近親者のみで行う。喪主は妻、洋子さん。

早稲田大を卒業後、出版社勤務を経て、1988年、西行を主人公とした伝奇小説「花月秘拳行」で作家デビューした。

骨太な歴史・時代小説で知られ、越後・上杉家の家臣、直江兼続を主人公とする「天地人」は2009年のNHK大河ドラマの原作となった。

ほかに徳川家康の懐刀だった禅僧・金地院崇伝を描いた「黒衣の宰相」、経済流通の視点も含めて真田一族をとらえた「真田三代」などがある。

13～14年に日本経済新聞夕刊に連載した「天下 家康伝」は家康の苦難の人生を描いた。14年10月に体調を崩して入院。「天下 家康伝」の単行本化に向けて校正を進めているところだった。

～これから歴史小説を次々と・・・と期待していた矢先に、残念の一言。

(2) 天地人の直江兼次の所領地、与板に、与板歴史民俗資料館（兼続お船ミュージアム）

兼続は上杉景勝の執政として、財政・外交・軍事の全般を掌握していた。多忙な兼続を支え、実務を担当した人々。それが兼続直属の家臣団である与板衆。 当時の記録によれば、兼続は上杉家の家臣団で最高の五万三千二百十七石という知行高を与えられ、与板衆121名を配下に従えていました。 与板衆は直江家代々の家臣を中心に他国出身者や寺院などで構成され、与板をはじめ、三島・和島・寺泊などに拠点を持っていたことが知られています。

(3) 与板城大手門 （ただし与板陣屋の大手門で、直江兼続の居城だった与板城とは別。）

与板城は、慶応4年（1868年）の戊辰戦争で焼失したが、大手門と切手門は戦火を免れた。大手門は明治4年（1871年）の廃藩置県の年に、浄土真宗本願寺派与板別院に移築され、第一の門となった。 門柱を礎石の上に直接建て門扉は枠の中に縦に厚板張り、鉄板を使用。この門は移築前には新町から長町（家中）に抜ける旧大手の通りにあり厳重なこ虎口であった。

(4) 浄土真宗本願寺派与板別院(新潟別院)

与板井伊家8代目藩主である井伊直経が寺の建立を発願し、本願寺から本尊を授けられたことが別院建立のはじまりとされています。

井伊家が現在地を寄進し1853年（嘉永6年）に本堂の工事を着工したものの、井伊氏の窮乏と幕末の混乱のため、1865年（慶応元年）に本堂の立柱式を挙行した際には屋根も葺かない状況だったそうです。1870年（明治3年）、ようやく本堂が完成し翌年に落慶式が行われました。

8.　校歌の歌詞と反戦の話について

以下は、「中越地区小・中学校校歌の作詞者十傑」ともいうべき人々のリストです。 多い順に
相馬御風、遠山夕雲、手塚義明、俵山喜秋、松岡譲、大橋士郎、堀口大学、宮柊二、
押見虎三二、谷津龍史、河本茂の十人です。
（折原明彦 著　校歌の風景 −中越地区小中学校歌論考−より）
全ての校歌作詞に、いい話があると思いますが、ここでは私の母校ということで、阪之上小学校、
東中学校の校歌に限定します。
補足として、堀口大學さんに関する話題ということで、長岡高校第二校歌について、一言
ふれさせてもらいます。

(1) 阪之上小学校・第一校歌　（作詞　多田 正知、’作曲　若林 孫次）
一番
文の林に生いたてる
若木は国の柱ぞと
三葉の柏の緑そう
ここ長岡の阪之上

その出自は時に明治九年まで遡るようです。
長岡学校開校時(長岡中学を経て、現在は長岡高校)の新潟県令永山盛輝が、
十二月一日の開校式に臨席し、次のような和歌を詠んで、長岡学校の開校を
言祝がれたとのこと。
　長岡学校の開校を祝て
　　長岡の文の林に生立てる
　　わか木は国のはしらとそなれ

この一節が、堀口大學作詞の長岡中学第二校歌(1941)の三番の歌詞に、ひきつがれています。
　歴史かがやく長岡の
　文の林に生ひたてる
　若木は国の柱ぞと
　誓ひ男々しく奮ひ立ち
　智育体育日も足らぬ
　われらよ自由民主の子　（尚、後半は新しい歌詞）

(2) 阪之上小学校・第二校歌　（作詞　松岡 譲 、作曲　今井 虎）
二番
　蒼紫の森の深みどり
　米百俵のいしぶみに
　母校のほまれたたえつつ
　我らつづかん意気高く
　三葉柏の旗のもと

このはじめの節が、旧・長岡市歌の出だしの歌詞に「蒼紫の森の緑濃く」に引き継がれています。
蒼紫の森の緑濃く
汪洋尽きぬ信濃川
越後平野の中心と
いや栄えゆく長岡市

(3) 東中学校の校歌の桜
松岡譲さんの作詞です。
東中は今朝白から水道町に移転したのですが、その今朝白校舎は、現在の阪之上小の
新校舎の建っているところにありました。
松岡譲さん作詞の校歌の一番の、「川辺のさくら　日に映えて」の桜は、福島江の桜です。

(4) 長岡高校第二校歌
戦前・戦中に、校歌認可制度があったのを、ご存知の方もおられると思います。
戦争の国威発揚の風潮の中で作られた校歌の歌詞を、戦後に変更された学校も
多いようです。　ここでは、長岡高校第二校歌の改訂についてお話します。
第二校歌とはいえ、卒業生の会合で歌われるのは、圧倒的に第一校歌より第二校歌です。

この第二校歌は堀口大學さんの作詞です。
真珠湾攻撃直前の、国内は戦争一色の時代でしたので、やむを得ぬこととはいえ、
始めの歌詞は、戦争への意識鼓舞の歌詞が散見されました。
現行の歌詞では、一、二番は、そのまま残っていますが、三、四番は、長岡市刊行の「ふるさと
長岡の人々」の大學の章にあるように、戦後、同校生徒会との話し合いの中で改訂されています。

大學は、戦後、「現代史」という詩のなかで、先の戦争への苦言を述べています。
あの大詔は嘘だった、
軍国日本三軍の絶対無二の大元帥
陛下は反戦主義だった
千万人が傷ついた
百万人が帰らない
嘘のようだが本当です

第二校歌作成の経緯、改訂の経緯については、図書館などで詳しく知ることが可能です。
希望される方には、文献名などの情報源を提供します。
極めてニッチな話ではありますが、個人的には、本当にすてきな話だと思います。
これらの経緯の話、この「現代史」という詩を通じ、反戦という内容で、話をすることも
できます。

9. 良寛さん

(1) 話題の切り口

余りにも多くの話の残る良寛さんですので、ここでは春日が時々使っている話題の切り口のみ、示します。

生誕の地である出雲崎

修業の地であ岡山倉敷、玉島の円通寺、師の国仙和尚

実家の家業衰退と父の死

越後での住まい

国上山の五合庵、乙子神社草庵

寺泊の照明寺密蔵院

島崎の木村家内草庵

島崎のはちすば通り

木村家内の墓碑と「僧伽」

三条大地震（文政11年（1828）11月）

寛政甲子の夏　～漢詩

凄凄(せいせい)たる芒種(ぼうしゆ)の後

玄雲鬱(うつ)として　披(ひら)かず

友人の酒造家山田杜皐（とこう）が末子を失い失意に呉れた、その友への手紙　～　「・・・・災難に逢う時節には災難に逢うがよく候・・・」

苦難を受け入れる、他力

貞心尼との交流

「蓮の露」の書

「恋学問妨」

貞心　如何にせん学びの道も恋草の繁りて今は文見るも憂し

良寛　如何にせん牛に汗せと思いしも恋の重みを今は積みけり

長善館の鈴木家との関わり

良寛の書

良寛と有願和尚（うがん）

良寛の漢詩、和歌、歌碑

与板 良寛詩歌碑公園

生家跡に建つ良寛堂は、日本画家・安田靫彦氏の設計

(2) 英文での説明 パンフレットより

Ryōkan Taigu (良寛大愚) (1758-1831) was a quiet and eccentric Sōtō Zen Buddhist monk who lived much of his life as a hermit. Ryōkan is remembered for his poetry and calligraphy, which present the essence of Zen life.
He is also known by the name Ryokwanin English.
hermit 隠者、(宗教的)隠遁者、世捨て人 ハーミット

Early life

Ryōkan was born Eizō Yamamoto (山本栄蔵 Yamamoto Eizō) in the village of Izumozaki in Echigo Province (now Niigata Prefecture) in Japan to the village headman.
He renounced the world at an early age to train at nearby Sōtō Zen temple Kōshō-ji, refusing to meet with or accept charity from his family.
Once the Zen master Kokusen visited the temple, and Ryōkan was deeply impressed with his demeanor. He solicited permission to become Kokusen's disciple. Kokusen accepted, and the two returned to Entsū-ji monastery in Tamashima (now Okayama Prefecture).

It was at Entsū-ji that Ryōkan attained satori and was presented with an Inka by Kokusen. Kokusen died the following year, and Ryōkan left Entsū-ji to embark on a long pilgrimage. He lived much of the rest of his monastic life as a hermit. His decision to leave Entsū-ji may have been influenced by Gentō Sokuchū, the abbot of the temple.
At the time, Gentō was aggressively reforming the Sōtō school to remove perceived 'foreign' elements, including kōan. The scholar Michel Mohr suggests Ryōkan may have been in disagreement with Gentō's efforts.
He was originally ordained as Ryōkan Taigu. Ryō means "good", kan means "broad", and Taigu means "great fool"; Ryōkan Taigu would thus translate as "broad-hearted generous fool", referring to qualities that Ryōkan's work and life embodies.

Life as a hermit

Ryōkan spent much of his time writing poetry, doing calligraphy, and communing with nature. His poetry is often very simple and inspired by nature. He loved children, and sometimes forgot to beg for food because he was playing with the children of the nearby village. Ryōkan refused to accept any position as a priest or even as a "poet." In the tradition of Zen his quotes and poems show he had a good sense of humour and didn't take himself too seriously.

Ryōkan's grave

Ryōkan lived a very simple life, and stories about his kindness and generosity abound. On his deathbed, Ryōkan offered the following death poem to Teishin, his close companion:

裏を見せ 表を見せて 散る紅葉
うらを見せ　おもてを見せて　散るもみじ
ura wo mise / omote wo misete / chiru momiji

Now it reveals its hidden side and now the other—thus it falls, an autumn leaf.
Although he lived a simple and pure life, Ryōkan also displayed characteristics that under normal circumstances would be out of line for a typical monk.

Final years

In 1826 Ryōkan became ill and was unable to continue living as a hermit. He moved into the house of one of his patrons, Kimura Motouemon, and was cared for by a young nun called Teishin. "The [first] visit left them both exhilarated (feel very happy and excited), and led to a close relationship that brightened Ryōkan's final years".

The two of them exchanged a series of haiku.
The poems they exchanged are both lively and tender. Ryōkan died from his illness on the 6th day of the new year 1831.
Teishin records that Ryōkan, seated in meditation posture, died 'just as if he were falling asleep'."

Stories of Ryōkan

This section needs additional citations for verification. Please help improve this article by adding citations to reliable sources. Unsourced material may be challenged and removed. (August 2013) (Learn how and when to remove this template message)
It is common practice for a monk to abstain from eating meat. Once a young monk sat to dinner with Ryōkan and watched him eat fish. When asked why, Ryōkan replied, "I eat fish when it's offered, but I also let the fleas and flies feast on me [when sleeping at night]. Neither bothers me at all."

It is said Ryōkan only slept with most of his body inside of a mosquito

net so that he would not hurt the bugs outside.

Ryōkan was fond of rice wine and would sometimes drink it to excess. "I send one of the children to buy some country wine/ And after I'm drunk, toss off a few lines of calligraphy."

Ryōkan attended the midsummer Bon Festivals. Because he was a monk, he would normally be unable to attend, but sneaked in disguised as a woman.

Ryōkan hated waste, and so any food that he was offered that he did not eat, he put into a little pot. Over time, the food rotted and became filled with maggots and other bugs. When warned against eating it, all Ryōkan said was, "No, no, it's all right. I let the maggots escape before I eat it and it tastes just fine!"

One evening a thief visited Ryōkan's hut at the base of the mountain only to discover there was nothing to steal. Ryōkan returned and caught him. "You have come a long way to visit me," he told the prowler, and you away. Ryōkan sat naked, watching the moon. "Poor fellow," he mused, I wish I could have given him this beautiful moon. This story may be an interpretation of an account mentioned by Ryōkan in a haiku:

盗人に取り残されし窓の月
ぬすっとに　とりのこされし　まどのつき
nusutto ni / torinokosareshi / mado no tsuki

The thief left it behind:
the moon
at my window.

放浪俳人
井上井月（文政5年（1822年）？ － 明治20年（1887年）
19世紀中期から末期の俳人。本名は一説に井上克三。
別号に柳の家井月。
長岡の千手で、下級武士の家に生まれた。勤王家で、幕末の藩内の勤王佐幕の争いを避けて出奔という説あり。筆頭家老の稲垣氏、藩校の教授の多くに、勤王を信奉するものが多くいたという。
「北越漁人」と号した。信州伊那谷を中心に活動し、放浪と漂泊を主題とした俳句を詠み続けた。
その作品は、後世の芥川龍之介や種田山頭火などに影響を与えた。

種田 山頭火（たねだ さんとうか、1882年（明治15年）－ 1940年（昭和15年））
山口県佐波郡の大地主・種田家の長男として生まれる。
戦前日本の自由律俳句の俳人。よく山頭火と呼ばれる。
「層雲」の荻原井泉水門下。1925年に
熊本市の曹洞宗報恩寺で出家得度して耕畝（こうほ）と改名。
本名・種田正一（たねだ しょういち）。

越後出雲崎生まれの良寛さんは、(1758-1831)と、時代が少し前。
信濃国柏原の小林一茶 (1763年-1828年)は、さらに前の時代。

ガイドの手引きより、井上井月の項

長岡藩士の出とされる放浪の俳人井上井月について、小説家芥川龍之介は、松尾芭蕉に匹敵すると、井月の句を高く評価した。
全国を行脚した井月ではあったが長岡には戻っていない。現在長岡で歌碑になっている句は次のとおり。

金峯神社境内（井月会）
行暮し越路や榾の遠明かり （ゆきくれし こしじやほだの とおあかり）
井月は遠く異郷にあって、かって越の道を旅した思い出を句に詠む。
或は、空想の中で薪の火の遠明かり遥か眺める夕暮れの旅人の心境を、句にものして言ったものか。放浪者井月の郷愁がにじむ。（大星光史）

悠久山参道
何処やらに 鶴（たづ）の声聞く 霞かな

井月の見事な辞世の句。薄明かりの内に聞く鶴の声のしづけさ。最後まで詩人としての矜持を失わなかった。
漂泊者としての生きざまの末66歳で野垂れ死に同様に、伊那で息を引き取った。（大星）

旭町柿川堤の一の橋たもと
　　鳥影の　ささぬ日はなし　青簾（あおすだれ）

　青簾にさっと影を落とし、よぎりゆく小鳥たち、樹々の緑と共に映る鳥影。
　この鳥のさえずりを聴き、時には青簾を揺らしてとおり抜ける涼風に生きる
　歓びを感じる。（大星）

栃倉酒造
　　よき酒の　ある噂なり　冬の梅
　　梅の花、梅の香りを好んだ井月は、酒もまた生涯の離せない友としていた。

　　酒を求めて訪ね歩く際に、梅の木のあるところを目安としていたことを漂わせる。
　　他に「しら梅と　呼びたき酒の　薫り哉」の句がある。（大星）

成願寺温泉
　　よき草の　なれも数なり　蕗の薹（ふきのとう）

　　そんなに遠慮することはない。お前だって良き草、立派な植物の一つに数え
　　られるんだよ。と、つつましやかに芽を出す蕗の薹に話しかけている。
　　生き方を問うてい る句か。（大星）

柿の広西寺
　　朝露の　ままで手向けん　蓮の花

越後を歌ったと思われる句は次のとおり
　　雁がねに　忘れぬ空や　越の浦
　　初鮭や　ほのかに明けの　信濃川
　　初雁や　二立ち三立ち　越の空
　　帰らぬは　死にそこねたる　不忠もの
　　立ちそこね　帰り後れて　行乙鳥（ゆくつばめ）

　　初夏に日本に来て秋に南に帰る燕。出発し損ねた燕のような
　　ぶざまな自分よ。井月にとって故郷は遠い。（大星）

(2)　種田 山頭火
http://www.e-net.city.nagaoka.niigata.jp/hakken/03_hakken/shousai101.html
　種田山頭火の句碑は、柿川に架かる追廻橋の脇（下流側）にある。
平成3年8月に長岡市山頭火句碑建立会の有志一同が建立。
種田山頭火は、明治15年（1882）に山口県防府市に生まれた（昭和15年没）。
「行乞流転」とも呼ばれる酒と旅の日々を送りながら、五七五の定型や季語に

とらわれない自由律俳句を確立し、漂泊の俳人といわれている。

句碑には「図書館はいつもひっそりと松の秀」と刻まれており、また裏面には
「長岡の俳友小林銀汀氏宅の二階より若葉ふりそそぐ隣接の互尊文庫を
眺めてつくる　　昭和11年5月31日作　　山頭火短冊による」と覚書。

（当時の互尊文庫は現在の長岡グランドホテルの場所にあった）。
小林銀汀（長岡の写真館主）と山頭火はともに自由律俳句を提唱した荻原井泉水の門下生だったことから、親交があり、山頭火は昭和11年に近畿・関東・北陸などを旅しており、その途中で長岡に立ち寄って、この句を詠んだ。

「図書館はいつもひっそりと松の秀」
～種田山頭火

山頭火は晩年の日記に「無駄に無駄を重ねたような一生だった、
それに酒をたえず注いで、そこから句が生まれたような一生
だった」と記している。その時にはすでに無一文の乞食であったが、
乞食に落ちぶれた後、克明な日記をつけ続けている。
その放浪日記は1930年（昭和5年）以降が存在し、それ以前の分は自ら焼却
している。死後、遺稿日記が公開され、生涯の一部が明らかになった。
1939年（昭和14年）愛媛県松山市に移住し「一草庵」を結庵。
1940年（昭和15年）10月11日、脳溢血のため一草庵で生涯を閉じた。
享年58。

代表句
あるけばかつこういそげばかつこう
ゆうぜんとしてほろ酔へば雑草そよぐ
けふもいちにち風を歩いてきた
この旅、果もない旅のつくつくぼうし
また一枚脱ぎ捨てる旅から旅
山へ空へ摩訶般若波羅密多心経
水音の絶えずして御仏とあり
ほろほろほろびゆくわたくしの秋
生死の中の雪ふりしきる
「分け入つても分け入つても青い山」
「夕焼うつくしく今日一日つつましく」

相馬御風と長岡

維新の暁鐘を読んだ人、と良寛のひととして、長岡と深い縁。

(1) 西福寺の歌碑
新潟県長岡市渡里町3-21の西福寺境内
歌「よはあけぬ　さめよおきよと　つくかねの　ひびきとともに　ちりしはなばや」

(2) 相馬御風は、長岡と深い関係のある良寛さんの研究家としても
よく知られています。
御風の良寛研究は大正5年に糸魚川へ退住してから、晩年までの30数年に及びます。 従って、御風の後半生は良寛研究とともにあった、といっても過言ではありません。

御風が研究を始めた大正時代前半、先にあげた『北越偉人沙門良寛全伝』をはじめとして、10冊にあまる著書がすでに刊行されていました。
しかし、これら先行の研究・著作に比べ、御風の『大愚良寛』は、分かりやすくその内容は良寛の生涯とその芸術、思想に及び、広く世に知られた点でも画期的な、不朽の名著といわれています
御風の良寛研究の特色は『大愚良寛』の緒言にあるように、その目的は「私一個の修養」「私みずからの為め」「もともと私一個の為めの仕事」としてのものであり、研究のための研究、あるいは学術論文のようなものものでした。
御風の良寛研究の成果は、http://www.city.itoigawa.lg.jp/4800.htm に紹介されている20冊以上の著書に結実しています。

(3) 県内の学校の校歌作詞No1、長岡市内の校歌作詞　農高他10校。
「新潟県立長岡農業高等学校校歌」(作曲:中山晋平)
「新潟県立栃尾高等学校校歌」(作曲:小出浩平)
「長岡市立大島小学校校歌」(作曲:中山晋平)
「長岡市立浦瀬小学校校歌」
「長岡市立福戸小学校校歌」 (昭和二十一年)
「長岡市立日越小学校校歌」
「長岡市立与板小学校校歌」(作曲:中山晋平)
「和島村立島田小学校校歌」(作曲:小林禮)
「越路町立塚山小学校校歌」
「山古志村立種芋原小学校校歌」

井上井月

日本経済新聞　2018年4月7日，14日

【第三種郵便物認可】

俳句 言葉の宇宙探訪

6

編集委員　中沢義則

井上井月 ㊤　伊那谷の漂泊俳人

日経 2018 4/7

言祝ぐ句、芥川龍之介も驚嘆

東京・東中野のミニシアター「ポレポレ東中野」で映画「ほかいびと　伊那の井月」を見た。江戸末期から明治中期に生きた放浪の俳人、井上井月がふらりとやって来た南信州の伊那谷で暮らした、およそ30年間を描いている。いい映画だった。

監督はドキュメンタリー映像作家の北村皆雄さん、75歳。東京・新宿で映像コンテンツ制作会社を主宰しており、日本映像民俗学の会代表だ。伊那市美篶出身の北村さんのもうひとつの肩書が井上井月顕彰会の2代目会長。井月を愛する伊那市の人たちが集まって発足。多彩な活動で近年の井月人気を盛り上げている。

完成までに4年を費やした「ほかいびと」も顕彰会を中心に制作、2011年に伊那市を皮切りに上映を始め、全国を巡回してフランス、ドイツ、中国でも上映した。伊那谷の美しい四季を背景に幕末、維新の風俗や行事、祭りなどを織り交ぜながら放浪を続ける俳人の姿をきめ細やかな資料に基づいて丁寧に描いた。

井月を演じた舞踊家の田中泯、ナレーションの樹木希林がいい。下伊那のゆかりの場所を巡ってロケをした。顕彰会の人たちのほか、地元の住民たちも出演している。

井月は1858年(安政5年)ごろ、飄然と伊那谷に姿を現す。37歳ごろにやってきて65歳ぐらいで伊那谷で死んだ。越後・長岡藩の下級武士で藩校で学び、江戸でも学問を修めたようだ。脱藩して漂泊の人になった後も俳諸の修練を積んだ。書の達人で俳諸に通じる教養人として、伊那谷の好学の士や趣味人に歓迎された。

きっと魅力的な人だったのだろう。物欲や金銭欲はなく、住まいを持たなかった。主に今の伊那市や駒ケ根市など上伊那の家々や寺を回り、書を揮毫し、俳諸の添削をし、連句の座を持って酒食のもてなしを受け、泊めてもらう。酒好きで呑むと「千岡、千岡」と言って喜んだ。しばしば野宿もした。

「ほかいびと」は大和言葉で言祝ぐ人のこと。出産や婚礼、家の棟上げや長寿を祝う句をつくる。悼む句も詠んだ。北村さんが育った美篶は井月終焉の地。「俳人井月　幕末維新　風狂に死す」(岩波書店)の著書もある北村さんは「井月さんと伊那谷の人たちとの交流に心惹かれる。優しい、お接待精神が井月さんを支えた。伊那谷の人間として誇らしく思うと話す。

こうした伊那谷の人たちの調査研究や井月の故郷、長岡の郷土史家らの研究で謎に包まれていた井月の前半生もすこしずつわかってきている。たとえば脱藩の理由。長岡藩は戊辰戦争で幕府側に付いたが、井月には勤王の志があったのだろう。藩の姿勢と相いれなかったようだ。

井月の発句がいい。「花に客しらで暮をうつ一間かな」「これは春の句。「ほととぎす旅なれ衣ぬく日かな」は夏。秋の句は「新米や塩打って焼く魚の味」。そして冬(新年)。「目出度さも人任せなり旅の春」。「どうだ、上手いだろ」という気負いを感じない。即席で詠むことも多いから月並み句もあるけれど、どの句も俳味があって、しみじみとした味わいがある。

伊那を訪ねた。東京・新宿から伊那バスターミナルまで高速バスで約3時間半。南アルプスと中央アルプスの山々に囲まれた広々とした盆地で、すがすがしくて気分がいい。

バスターミナル近くの市立創造館2階の井月展示室がよかった。16年の顕彰会の呼びかけに市が応えてできた。散在していた井月の資料を集めた。こちんまりした部屋に句を記した短冊や書や屏風などが並ぶ。井月が世話になった人々から見つかったものがほとんどだ。驚いたのが書の筆跡の美しさだ。端麗で品格があるのが素人目にも分かる。

明治維新後、世の中も人々も変わったが、井月は伊那谷を漂い続けた。菖蒲に心酔して、風狂を好んだ。竹の杖を持ち、粗衣は垢じみて風がたかっている。女性や子供たちに「乞食井月」「虱井月」と囃されて、悪ガキに石を投げられた。

その悪ガキのひとり、下島勲が東京に出て医師になり、無名だった井月を世に出すきっかけをつくる。下島は芥川龍之介の主治医を務め、空谷の号を持つ俳人でもあった。下島が芥川に井月の書と句を見せたところ、芥川はまず書を見て「神業というべきもの」と驚嘆して、句集の出版を勧めた。それが1921年(大正10年)に出た「井月の句集」だ。芥川は人脈を生かして高浜虚子らから句を得て、「あとがき」も書いている。

伊那市に着いたのが3月9日。翌10日は井月が亡くなった井月忌で、顕彰会の人たちと墓参りをした。顕彰会理事で広報担当の矢島信之さんが墓参に連れて行ってくれた。

矢島さんも「井月愛」が強い、とても親切な人だ。事前に貴重な資料をたくさんいただいた。矢島さんの案内で井月ゆかりの場所を巡った話は次回に続く。

顕彰会の人たちと井月の墓参をした

【第三種郵便物認可】

俳句 言葉の宇宙探訪 7

井上井月 ㊦ 伊那の人々に愛され

編集委員 中沢義則

日経 2018 4/14.

井月忌の3月10日、伊那谷には朝早く雪が降った。井上井月顕彰会広報担当理事の矢島信之さんに伊那市美篶末広の墓に案内してもらった。墓参は朝8時から。5㌢ほど積もっていた。とても寒い。

顕彰会の理事4人が顔をそろえていた。矢島さんは気配りの人で墓地の入り口から井月の墓まで雪かきをしてくれていた。この俳人が好きだった酒瓶も供えてあった。

とても小さくて清々しい「降るとまで人には見せて花曇り」の句が刻まれている。

正式な井月忌の集いは3月4日に東京・四谷の主婦会館で開いた。恒例の俳句大会も催し、最近の井月人気もあって盛況だった。

理事4人は「井月愛」が強い人ばかり。この俳人についての蘊蓄をうかがった。井月の墓の向かいに立つ大きな墓は塩原家の墓だ。美篶の農家で、井月はその分家の人々に面倒を見てもらった。

行き倒れて担ぎ込まれたのが塩原の分家で、庭にある小屋で息を引き取っている。1887年（明治20年）3月10日のことだ。

理事のひとり、下島大輔さんの駒ケ根市中沢の住まいは下島勲の生家で親戚にあたる。勲は芥川龍之介に井月の句と書を紹介、それがきっかけで出版された「井月の句集」で名が次第に世の中に知られるようになる。

句集の初版本を手にして、下島さんは「龍之介をはじめ著名な作家や画家などが関わった実にぜいたくな本です」と解説してくれた。「顕彰会の活動は軌道に乗ってきましたが、子供や若者にもっと井月さんの魅力を伝えたい」と話す。

矢島さんが車で井月ゆかりの場所を巡ってくれた。伊那市には井月の碑が約70ある。一番見たかったのが放浪の自由律俳人、種田山頭火の碑だ。井月の碑と並んで美篶笠原に立っている。蹉跎を重ねて家を捨て、死と向き合って世捨て人のように放浪しながら句作を続けた。井月はあこがれだった。

彼が井月の句集に初めて出合ったのは1932年（昭和7年）8月。30年に出た井月全集を手にして、日記に「今までに読んでなければならない本だった」と記した。後に「私は酒類や一茶のことはあまり考へない、路通や井月のことばかり考へている、彼等の酒好や最後のことである」と書いている。八十村路通は放浪の俳人で、生まれは美濃、京都、近江など諸説がある。山頭火は38年5月には伊那の女学校の教師で俳人の前田若水の案内で墓参している。

ふたりの碑は畑の中の疎水の脇に建っている。雪曇りで周りの景色はよく見えないが、晴れれば山々の絶景が見渡せるはずだ。

矢島さんの運転でいくつかの峠を越え、いろいろな集落を回った。井月はよく歩いたなあ、と思った。家々に残る井月物語を矢島さんに聞いた。

最も新しい句碑は昨年5月、伊那市の高鳥谷にある。住民ら639人が資金を出し合ったという。「大勢の人たちが井月さんのために力を合わせた。協力してくれたのがうれしい」と矢島さんは話す。

昼食は駒ケ根の食堂「水車」で井月丼を食べた。イノシシの肉にゴボウを合わせて甘辛く煮てご飯に乗せてある。「井月さんに獣の肉を食べる『薬食い』の句があるのでつくってみました」と社長の宮沢宏治さん。

店には小さな井月コーナーもあって、宮沢さんも、この俳人に入れ込んでいる。

曇り空から陽が差し、だんだん晴れてきた。山々がくっきり見え、天竜川とその支流の風景も美しい。「伊那、とりわけ上伊那は広いんです。信州の中では暖かい方です」と矢島さんは話す。流れてきた井月を手厚くもてなしたのも、そのおおらかさ故だろう。

伊那の人たちの「井月愛」を語るとき、欠かせない存在が竹入弘元さんだ。86歳。今も続く井月の句の鑑定を中心的に関わっている。伊那北高校の国語教師だった。映画「ほかいびと」を監督した北村皆雄さんも矢島さんも教え子だ。

何しろ井月が泊めてもらった家はおよそ100軒、食事をした家は約200軒。新たな句の発見は続き、今では1800前後に増えている。竹入さんは長年、句の吟味や解釈、全集を監修してきた。今年8月には5度目の改訂版「新編井月全集」を出す予定で、厳選した1747句を収録する。井月の句や文章以外の解説や資料などを現代かな遣いにして読みやすくする。

この日の墓参にも列席の予定だったが、寒さのため、大事をとって欠席だった。

主に伊那の人々の尽力で井月の評価は高まっている。おかげで井月は小林一茶から正岡子規までの幕末・維新を挟んだ「俳句空白の100年」を埋める俳人のひとりと評価されるようになった。

種田山頭火の碑㊤が井月の碑と並んで立っていた

生活支えた家々、句の発見続く

講演会リポート③

映画「ほかいびと―伊那の井月―」上映会と北村皆雄監督による講演会

講　師：北村 皆雄監督
聞き手：大日方 英樹氏（新潟日報社記者）

2017年 7月15日(土) メディアシップ2階日報ホール

小林一茶から正岡子規まで空白の俳句史を埋める俳人が、故浪俳人井上井月だという。漂泊の地は信州の伊那路周辺である。なんと長岡の出身。井月ファンのO氏から提案があり、遅ればせながら、29年7月7日～9月24日の間、企画展「芥川がうなり、山頭火があこがれた～漂泊の俳人　井上井月」を催しました。その記念イベントとして井月をテーマにした映画「ほかいびと～伊那の井月～」を制作した北村皆雄監督をお招きし、7月15日、メディアシップ日報ホール、上映会と北村監督の講演と対談（インタビュアー新潟日報記者・大日方英樹氏）を開催しました。

漂泊の俳人～井上井月

勤皇か佐幕か揺れる長岡を出奔

この映画には主演の田中泯さんのほかは井月の研究または慕う伊那の人々が約200人出ている。伊那の四季の自然の美しさを映すために2008年から3～4年間かけて撮った。

もともと井月が世に出るきっかけを作ったのは、映画の中にも出ていた、晩年の井月に石を投げつけていた子供たちの一人である、のちに芥川龍之介の主治医をしていた下島空谷だった。空谷が井月の話をしたところ、芥川に勧められて、1千余の俳句を収録した「井月句集」が大正10年に刊行された。その跋文に芥川は「この世知辛い近世にも、こういう人物があったということは、我々下根の凡夫の心を勇猛なら

映画「ほかいびと 伊那の井月」の一場面（主演＝田中泯）

しむる力がある」と書き添えている。

幕末に伊那を訪れた井月の俳句は、現在1800の句が確認されているが、その多くは、目出度いことを寿ぐ句、あるいは死者を追悼する句です。例えば初孫が産まれた家には「直ぐなる見る竹の子の育ちかな」、死者の遺族には「朝露のまま手向けん蓮の花」「是非もなく彼岸桜の別れかな」と。

寿ぐとは万葉集にもありますが、祝言や寿詞を唱える神事から生まれたもの。（乞食者）と書いて「ほかいびと」と読ませている。もっとも古い旅芸人、家々を回って門付をする芸人、井月の芸は俳句で人々を寿いでいたのです。

井月は謎だらけの人物。自分のことはなかなか語らず、話もモゴモゴと聞き取れなかったという。唯一、高遠藩の家老を訪ねた時「お主はどこの生まれか」と問われ「越後長岡の産」と答えた。また、明治期、草庵を設けるにあたって戸籍が必要となり、長岡に帰る送別会を開いたことがあった。だが、出身地を示す証拠がなく、長年わからなかった。

相馬御風の手伝いをしていた俳諧研究者・木村秋雨が昭和初期に長岡を訪ね回ったところ、90歳の老婆から千手町に井上という下級武士で、刀の磨師を副業にしていた家があったと聞き取り、その報告を晩年、雑誌に寄稿している。その後、河井継之助記念館の稲川明雄館長も詳細な調査をしてくれて、古地図に井上弥市左ヱ門という28石取りの家が載っていた。そして井月の本名は井上勝蔵（克三）らしいと判明した。

その井月がなぜ出奔して伊那に来たのか？いろいろな説が伊那にはあった。殿様をいさめたからとか、幕末の勤王佐幕の争論で同輩をあやめたとか。

井月が最初に伊那に来た時、世話になった家に預けた、井月が一字一句書き写した文書があった。それは幕府から禁書とされた『歌之中山吾妻物語』。朝廷と幕府が対立し朝廷が勝つという、実際とは異なる内容だった。若いころの井月は勤王派だったと言える。

戊辰戦争で徹底的に新政府軍と闘った長岡藩は決して佐幕論の一枚岩ではなかった。筆頭家老の稲垣平助は水戸の勤王思想を信奉しており、長岡藩の藩校・崇徳館の教授たちの多くも勤王派で、教授の酒井は河井継之助の暗殺を企てたそうです。しかし殿様は河井を抜擢し、藩論が佐幕と決まった以上、勤王派の教授たちも従軍して酒井は戦死している。

井月は戦争前から出奔していた。最初の信州入りは18～20歳のころ。長野県北部では「泥くさき子供の髪や雲の峰」、また善光寺では追悼句「乾く間もなく秋くれぬ露の袖」を残している。その後は水戸に行って勤王思想家・藤田東湖のところで学んだり、奥の細道の芭蕉の足跡をたどったり、全国を行脚したようだ。

北村皆雄監督

37歳で伊那に来た。その姿は深編笠に黒羽二重の着物に木刀をさした侍姿だったという。しかし、この数年前に井月は入道姿で善光寺を訪ねている。「捨つべきものは弓矢なりけりと称して越の井月が入道姿でわが草庵へ」という僧侶の記録もある。

確かに井月は仏教に造詣が深い。一時、出家したかもしれない。俳句には仏教者や放浪者へ共感する句がいくつもある。「有りし余の憂さをも語れ鉢たたき」。空也上人を慕う半僧半俗の人々を詠んだ句。また西行にも心を寄せていた。「今日ばかり花も時雨よ西行忌」。新暦の3月10日は井月が死んだ日で、西行と同じ日。

西行、芭蕉を慕い門付俳句で放浪

井月は一遍上人にも影響を受けている。一遍の言葉に「身命を山野に捨て、居住を風雲にまかせ、機縁に従って徒衆を領し給ふといへど、心に諸縁を遠離し、身に一座もたくはえず」とある。これに憧れるように井月は生きた。一遍と同様に、井月は「俺が死んだら俵に詰めて川に捨てよ」と言っている。

しかし、最大の影響を受けたのは松尾芭蕉。芭蕉の「幻住庵記」を暗唱していて一字一句間違えず書いている。「わが道の神とも拝め翁の日」と吟じている。芭蕉は41歳から旅をして「野ざらし紀行」「そして「奥の細道」が50歳。井月は30年間も旅だった。乞食に憧れた芭蕉の旅は、「木の下、石の上に伏すとも二宿はよくない」とする美学を語るが、実は虚構に包まれた旅。旅先には地元有志が待ち構えている計画された旅だった。井月は宿泊できる家には何泊もしており、放浪を100%実践し、生身で旅をした。しかし芭蕉はのちに俳聖とあがめられ、井月は野垂れ死にした。芭蕉に憧れて、家も家族も捨てて俳句に生きた俳人も多い。井月もその一人。「妻持ちしことも有りし着衣始」「道るあてもなき蟹買ひぬ二日月」の俳句からうかがえる。

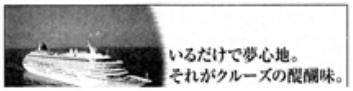
また影響を与えた人物として良寛を言わなければならない。芥川は「井月の道情は良寛にも劣らない」と書いている。井月の文学は良寛の筆致と似ていると感じる。良寛は「名利などどうでもよい」という言葉を残しているが、井月と共通するところだ。明治になって、戸籍制度ができて、放浪者井月は非常に生きにくくなった。無人の寺も壊された。

しかし、乞食井月と嫌われた晩年の1年間の日記が出てきた。その1年間で、宿泊した家が100軒、昼飯を食べさせた家が201軒もあった。明治の世知辛い世になっても伊那では多くの家が宿泊や昼食を提供し、井月と交流を保っていた。井月さんの故郷越後で、伊那の私が来て講演することに感慨深いものがあります。

コニカミノルタNC株式会社
本社　〒950-0141　新潟市江南区亀田工業団地1-2-13
TEL（025）383-3000　FAX（025）383-3001
URL　http://konica-businessinnovation.jp

創業安政五年
新潟　大阪屋

ご本人も、ご家族も幸せに暮らしてほしい。
それが私たちの願いです。


いるだけで夢心地。
それがクルーズの醍醐味。